

地震研究所正門脇「モニュメント」(地震学発祥記念碑) の歴史について

高島悟史*

History of the Monument placed near the front gate of Earthquake Research Institute

Satoshi TAKASHIMA*

はじめに

現在、地震研究所正門の脇に「モニュメント」(図1)が設置されている。これは一体いつから、何のために置かれているのかを知っている人も随分少なくなっているのではなかろうか。かくなる私も管理係長、そして専門職員として5年間地震研究所に勤務し、建物・設備等の管理業務に携わることによって、その経緯を知ることになったのである。せっかくの機会でもあるので、調べることができた範囲で紹介したい。



図 1. 地震研究所正門脇のモニュメント.

本郷地区時代

地震研究所は1925年11月、当時の文部省震災予防調査会の研究業務を引き継ぐ形で設立された。その後1928年に大講堂の東側、現在の理学部4号館の位置に、建築学科教授内田祥三の設計による研究所の建物が新築され、その建物の正面には同じく建築学科教授岸田日出刀の手による月と太陽をイメージしたモザイクがあり、側面には地震計をモチーフにしたオブジェがあった。この建物は1963年に現在の弥生地区に移転するまで利用し、その後施設部が1979年9月まで利用した後、暫定的に薬学部が使用していたが、1981年11月に理学部化学館増築のために取り壊しとなったのである(東京大学広報委員会, 1981)。

なお、かつての建物は地震研究所要覧1992年版の裏表紙裏に掲載されており、建物正面の日と月のモザイクと、斜めで見にくいですが、建物右側壁面の一階天井付近にオブジェがある(図2)。



図 2. 1928年、大講堂東側の現理学部4号館の場所に建設された地震研究所建物(地震研究所要覧1992年版より転載)。

2013年8月20日受付, 2013年12月24日受理.

takasima@nuclear.jp

* 東京大学工学系・情報理工学系等事務部

* Administration, School of Engineering, the University of Tokyo.



図 3. 寄贈され、現3号館の位置にあった地震学発祥記念碑とオブジェ. 台座中央に銘版.

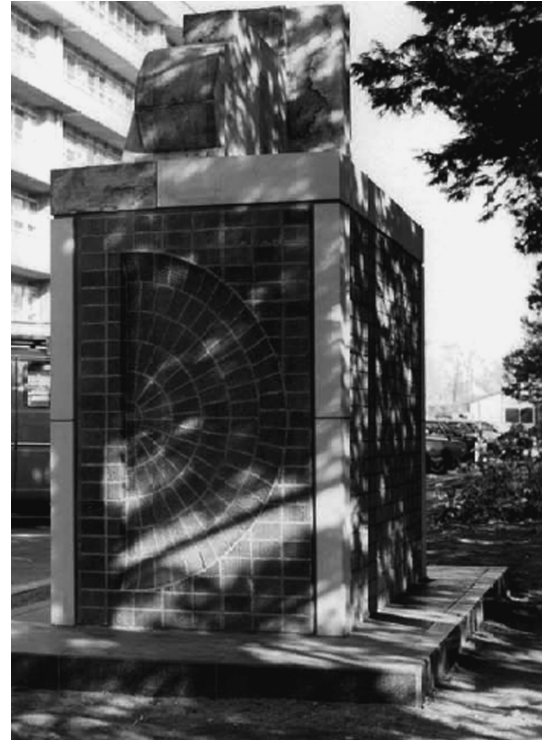


図 5. 右側面は月のモザイク.

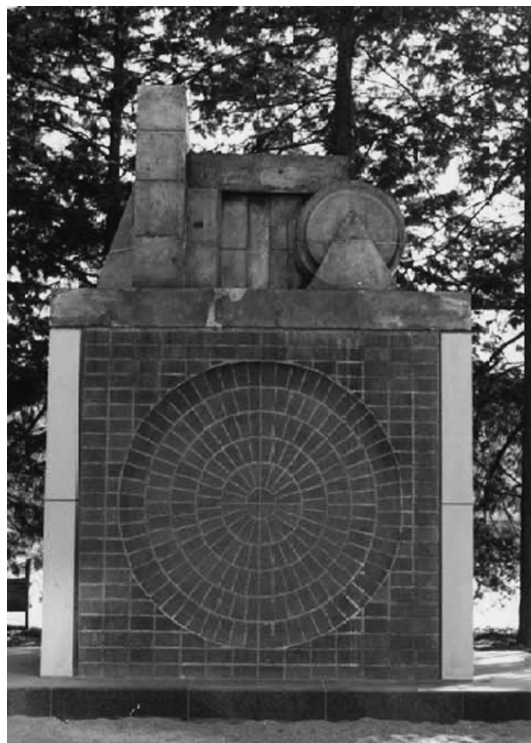


図 4. 台座正面の中央に日のモザイク.

「地震学発祥記念碑」の寄贈

それからしばらくの間、取り外されたオブジェとモザイクは野晒しで放置されていた。しかし、1983年8月に大成建設(株)東京支店から、「地震学は構造物耐震設計の基礎を為すものとして、建設工学の進展に多大に寄与し、その発展について重大な関心を有する次第です。ここに今日の耐震設計の礎石となった由緒ある地震計と日月の石飾りを、地震学発展の象徴の碑として末永く保存し、併せて将来の地震による建造物の被害の軽減を願って建立したい」として記念碑建立寄贈申込があり、11月22日に完成・引渡しが行われ、国有財産として登録された。

この記念碑は「地震学発祥記念碑」として現在の地震研3号館の位置に建てられ、高さ1.79mの台座の上にオブジェが乗り、左側面に銘板が取り付けられ(図3)、正面に日(図4)、右側面には月のモザイクがあった(図5)。また、内部にはタイムカプセルとして、1. 地震学発祥記念碑建立奉告祭司、2. 第一回地震研究所協議会(現教授会)議事録、3. 地震研究所50年の歩み、4. 地震研究所要覧(1982)、5. 地震をさぐる、6. 東京大学職員録(1983年度版)、7. 創立50周年記念 鯉文鎮 8. 地震研究所旧館全景写真及び関係者集合写真、が納められた。

正門脇への移設

記念碑の回りには鎖も整備された（図6、地震研究所広報No.12表紙 96年3月）。しかし、この場所に新たにテレメタリング棟（現3号館）を建築するために移設することとなったのである。テレメタリング棟は1996年3月に着工され、翌年竣工した。その着工時に記念碑は取壊しとなった。地震計オブジェは現2号館玄関の左脇に置かれていたが、モザイクについては台座とともに取壊しになったようである。

その後、東京都の下水道工事により正門の改築が行われたのを機会に、現在の位置への移設が計画された。1998年7月に移設工事は行われ、7月28日に地震研究所、東京都及び施工した(株)大林組関係者による「モニュメント備

え付け式」が執り行われた。タイムカプセルもこの時に改めて埋設されたのである（図7）。なお、タイムカプセルの蓋には「1998年10月」と記されているが、なぜ10月となったのかは不明である（図8）。

そして地震計オブジェの右側には、「記念碑」左側面にあった碑文が設置されており（図9）、その全文は次のとおりである。

「大正14年11月14日に地震研究所設立の官制が施行され、安田講堂裏に建物がつくられることとなった。昭和2年3月に着工し、翌3年3月に竣工した。建物は地下2階付きの鉄骨鉄筋コンクリート構造2階建てで、建築学科教授内田祥三先生が設計されたものであった。大地震が襲来しても建物内で観測や研究が出来るようにと、当時の標準



図6. 鎖も整備された（地震研究所広報No.12 1996年3月）。



図8. 7月に備え付け式が執り行われたが、蓋には10月と表記されている。



図7. 1998年7月に正門脇に移設された際のタイムカプセルの蓋。

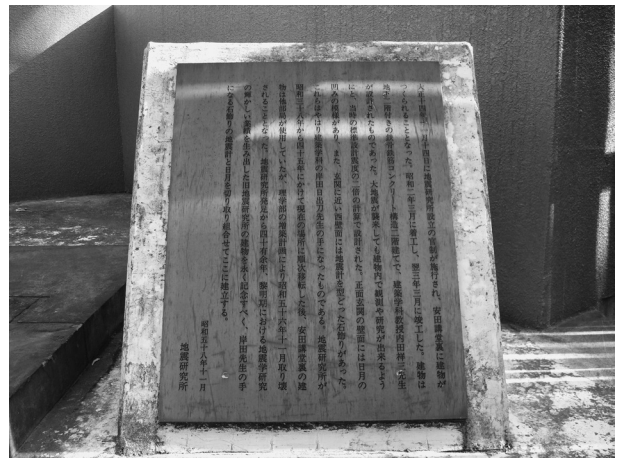


図9. 碑文の全文。

設計震度の2倍の計算で設計された。正面玄関の壁面には日月の凹みの模様があり、また、玄関に近い西壁面には地震計をかたどった石飾りがあった。これらはやはり建築学科の岸田日出刀先生の手になったものである。地震研究所が昭和38年から45年にかけて現在の場所に順次移転した後、安田講堂裏の建物は他部署が使用していたが、理学部の増築計画により昭和56年11月取り壊されることとなった。地震研究所発足から40有余年、黎明期における地震学研究の輝かしい業績を生み出した旧地震研究所の建物を永く記念すべく、岸田先生の手になる石飾りの地震計と日月を切り取り組合せてここに建立する。

昭和58年11月
地震研究所」

おわりに

以上が、私の手に入った資料から「モニュメント」の歴史を振り返ってみたものである。今まではただ何気なく脇を通っていただけであったものが、実は地震研究所の歴史の重みを感じさせる貴重なものであることに気付かされよう。それだけに、「記念碑」の碑文にある「石飾りの地震計と日月を切り取り組合せてここに建立する」とされたにもかかわらず、1996年の取壊しによって「日月のモザイク」が現存しなくなったことが悔やまれる。

追記

2010年4月1日付けで工学系・情報理工学系等事務部総務課東海チームに異動となり、新たな職場が茨城県東海村の原子力専攻となった。

ここでは、研究用原子炉「弥生」の廃炉に向けた取り組みが開始されており、2011年3月末をもって原子炉の運転を永久終了し、記念式典を挙行すべく準備を行っていた。

そうした中、3月11日に東日本大震災が発生し、当地においても震度6弱の揺れを観測し、また、度重なる余震

により建物・敷地・研究設備等に甚大な被害を被ったのである。電気・ガス・水道の復旧にはかなりの時間がかかる中、専攻内施設及び外来研究員宿泊施設において家族を含めた避難生活が始まった。

震度4以上の余震のたびに原子炉をはじめとした建屋・研究設備等の点検、また3月15日には東京電力福島第一原発で水素爆発が発生し、放射性物質の放出による当地における放射線量の上昇のため、午前7時54分に原子力災害対策特別措置法に基づく緊急通報を政府機関・近隣自治体等に対して行った。

なお、原子炉「弥生」については、地震発生時に緊急停止したものの事故等はなく、以後運転停止となっている。震災被害については、災害復旧費により工事や研究機器等の修理・購入が順次進められ、現在では震災の爪痕はほとんど見られなくなったが、全国からの共同利用再開は一部を除き完全には行われていない。

2013年7月現在、2013年度末までの予定で「弥生」炉の廃止措置が進められており、これが完了すると、原子力専攻は「原子力事業所」ではなくなり、様々な規制からかなり解放されることとなる。そしてこれからは、専門職大学院における教育と、種々の大型実験設備を利用した全国大学共同利用のいっそうの充実に向けてのとりくみが進められることになる。

謝辞：本稿の投稿および取りまとめにあたり、東京大学地震研究所の折橋裕二助教には多大なご支援をいただきました。また、査読者の新谷昌人准教授、鈴木雄治郎助教には、本稿を改善する上で有益なご指摘をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

文献

東京大学広報委員会, 1981, 消え行く由緒ある建物とオブジェ (表紙写真説明), 学内広報, 538, 2.